

1. 開会

2. 議事

(1) 第2回委員会議事要録について

<事務局説明>

<了承>

(2) 専門委員からの提言について

【副委員長提言】

障害者に対する視点として、バリアフリーということで、物理的バリアが環境や機械や建築、心理的バリアが心や偏見、差別意識、社会的バリアが社会制度やプログラムと分かれています。障害者だけではなくて高齢者、病気、妊婦、ベビーカーを押す人、一時的にけがをした人も含まれておりますので、誰もが対象となりうると思います。ユニバーサルデザインは、誰もが使いやすい商品やデザインやサービスを指しております。

最近「合理的配慮」という言葉があちこちで聞かれますが、内閣府の合理的配慮ガイドブックによりますと、役所や事業者に対して、障害のある人から社会の中にあるバリアを取り除くために何らかの対応を必要としているとの意思が伝えられたとき、負担が重すぎない範囲で対応すること、事業者に対しては対応に努めることが求められています。もし重すぎる負担があるときには、その理由を説明して、別の負担を提案することも含め、理解を得るように努めるとなっています。合理的配慮の具体例としましては、基準や手順の柔軟な変更ということで、例えば障害を持った方は非常に疲れやすいので、休憩時間の調整や、慣行を柔軟に変更すること。物理的配慮はスロープや床を滑りにくくする、エレベーターがない場合はマンパワーで移動をサポートする、多目的トイレということで、これはいろいろなところで整備されているかと思います。あとは補助器具やサービスの提供になります。

これからの課題としては、情報提供や利用手続きについての配慮や工夫ということで、説明文書の点字板、拡大文字板、テキストデータ、音声データの提供ということで、最近AIを使ってテキストデータの提供等が行われています。それから手話、要約筆記、筆談、図や絵、写真、ふりがな付文書の使用、発達障害の方は時間の概念や抽象的な内容がわかりにくいので、図を使って説明する、後は電子メールやホームページ、ファックスなど、多様な媒体で情報提供、利用受付を行う。また、障害を持った方で家族や介護者の方がいると、つい付き添いの方に聞きがちですが、意思がはっきりしている方はたくさんいらっしゃるのです。まずは本人に尋ねることが重要だと思います。

建物や設備ですが、電光掲示板などの設置、音声ガイドの設置。発達障害の方は音があるとパニックを起こしやすいので、そういったときのために小部屋のようなものを設けることも必要だと言われています。また、発達障害の方の中には、音声や光に過敏な方がいらっしゃいますので、サンングラスやイヤホンやヘッドホンを使用するということが含まれています。

コミュニケーションや情報のやりとり、サービス提供については、館内放送を文字化する、電光掲示板で表示、手話通訳や要約筆記者、口話が読めるようにマスクを外して話をする、AIを活用したコミュニケーション機器、あとは座席も大事ですし、申請書や書類などの記入代行や補助、ただこれも一方的に書くのではなくて、その方の意思を十分に確認する必要があると存じます。

外国人に対する視点ということで、これは総務省の資料を元にまとめております。こちらは4つに分けられると思います。

まず一つ目はコミュニケーション支援で、多言語による情報提供が重要と思います。ただ多言語と言っても限界があるので、やさしい日本語による情報提供、特に全言語による情報提供が困難な場合、その他の言葉を含めて、特に緊急発生時にはやさしい日本語や絵で示すことが重要だと思います。日本語学習支援ということで、成人の方は生活習慣による生活困難にも非常に配慮を必要としますし、お子さんの場合は言語を覚えることは非常に早いと思いますが、親御さんとの間で言葉のギャップが出てくることがあって、その辺の配慮も必要だと思います。

生活支援については、居住では日本独自の習慣として礼金や敷金、ゴミ出しについて情報提供など。教育に関しては、子どもに対しての日本語教育と、算数とか社会科のような教科教育、慣れるためのプレスクールも必要かと思います。労働環境ということで、日本語と、その方が話す言語に対応する他に、労働に関する習慣の情報提供。例えば日本はアフターファイブの飲み会があって実はいろいろなことが決まるという、その辺は暗黙知だと思いますが、そのギャップを埋めることも重要かと思います。医療、保健、福祉に関しては、最近は医療通訳も出ていますので、そういった方も必要かと思います。防災、災害時の情報伝達や地域の担い手、共助としての位置づけも必要かと思います。

多文化共生で言いますと、多文化に対する住民の理解や交流の機会ということで、よくあるのが民族や宗教、文化による生活習慣、例えばイスラム教の方向けのハラール食、あるいはベジタリアンの方がいらっしゃると思いますが、そういうことについて理解と配慮を求める機会も必要です。外国人の自立と社会参画ということで、特に日本に定住することを決めている場合には、地域への参加による地域課題の解決ということで、外国人ヘルパーを養成することも重要かと思います。多文化共生に関わる体制づくりとしては、行政サービスや包括的支援体制も重要ですし、そのことで地域の活性化やグローバル化への貢献ということも非常に重要かと思います。

今回、障害者と外国人の方への視点としましたが、必要な視点としては3つに分けられると考えます。

まず一つは情報提供、多様な手段や方法の活用ということで、今はテキストデータがあればいろいろな言語が音声、簡単な翻訳もできますので、そうした技術やAIの活用、言語も全てに対応できない場合には絵や写真、あとはやさしい日本語にするなどの対応が必要だと思います。

次に専門機関への仲介的な役割ということで、例えばこの施設だけで全部対応することは難しいので、ニーズにあった専門機関、例えば高齢ですと地域包括支援センターにつなげることが重要だと思うので、連携やネットワーク体制が必要だと思います。

それから私たちはどうしても外国の方や障害を持った方、場合によっては高齢の方について、支援の対象と思いがちですが、そういった方も共助の担い手としての役割があると思いますので、可能であれば本施設の活動に参加してもらい役割を持たせる。何か役割を持ってもらうことでまちに対する帰属意識を持って共生が進むのではないかと思います。

【委員提言】

図面を見ていただくと、敷地面積が 646 m²で、建ぺい率が 50%、容積率が 100%です。建ぺい率は建物の投影が 50%ということで、この敷地に対して 50%をあてはめると 2 枚目の図面になります。これが総 2 階になります。北側は 2 m 空けて、サイドを 2.5 m 空けるとだいたいこのぐらいいなくなります。容積を全部使おうとすると 2 階建てで、敷地に対して巨大なものになるのではないかと思います。一部、3 階になるのかなと。私が設計するわけではないので、こういう面積の比率になることを認識していただきたいと思います。

1 枚目の図面は皆さんのディスカッションを聞きながら考えましたが、大きな部屋と小さな部屋が必要になると思います。全部同時に使う場合と個別の部屋を使う場合があるので、大きな部屋と小さな部屋を組み合わせ、ケースバイケースで建具を開け閉めしながら部屋が利用できるようにすると、プライバシーも保てるし環境的なコントロール、冷暖房等もいけるのではないかとということで、簡単に描いてみました。前面道路に対して、建物が一部、飛び出たようなものがあつた方が良くと思いました。これも総 2 階にすると容積率を全部使います。この敷地に対して建物のボリュームがどうか、イメージしてもらえればと思います。建ぺい率 50%を全部使うと、車はほとんど停められない感じです。一部 3 階にするのか、容積を使い切るのかというディスカッションが必要だと思います。どういう諸室が必要かの面積を加えてブロックプランを作っても良いと思います。仕切りはパーティションでやるか、音響的なことでは防音もありますし。簡単なものなら開いてやっても。皆さんの話を聞いてイメージすると、全部の部屋を開いて使う時と、時間軸で使う時と、小部屋があつて閉めることもできるしオープンにもできる方が良くと思います。

これには描いていませんが、天井高をコントロールする必要があります。子どもさんが使う部屋は高い天井だと不安定になりますし、そうかと言って皆さんが使う部屋は高い天井にした方が良く。それをコントロールしながら一部 3 階建てというのもあつて良くと思います。

また、建物の間にデッキを貼るなど、野外になるようなデッキをつくと、建物から人がはみ出すようにもできるのかなと思いました。こういうことをするとガチャガチャ感と統一感が出てくるのではないかと。

【委員長提言】

豊かな地域社会を目指して 1999 年 3 月「新世紀の豊かな地域社会を考える委員会最終答申」をまとめました。ここでテンミリオンの原型のようなイメージを検討して答申をし、その後、庁内でテンミリオンの検討委員会が発足しております。

豊かな地域社会とは、4 つの捉え方をされていて、特に住民の相互的なふれあいや交流活動があつて、住民がその地域に対して帰属意識を持っているということが核になるということです。武蔵野市はその頃も、かなり住民の移動が多くて、4 年で半分、10 年でかなり入れ替わる、特に若い世代の移動が非常に多く、帰属意識が希薄であるという特徴を持っていました。それを何とかしないとイケないということで、特に子育てしやすい環境をつくることを心がけないと、ということが議論されておりました。

そのとき、豊かさということを考えて、コミュニティを見直そうということで 7 つの視点を挙げました。(ア) の安全・健康が守られているか、特に今の観点だと災害への備えが重要になってくる。

(イ) 生活は便利で住民のニーズは満たされているかは、特に福祉施設、高齢者施設、障害者や障害児の施設、児童館、保育所を意識しておりました。(ウ) 人間形成の場として必要な条件は満たされているかということでは近隣のお付き合い、ふれあい、子ども会、若者グループなど、いろんな人々

とふれあうことが必要と。(エ) 人間性回復の場所と大きさに書いてありますが、これはレクリエーション活動や趣味、文化活動、グループ活動、スポーツ、ボランティア活動が多彩に行われているところをイメージしました。(オ) 情緒安定の場となっているかということは、家庭や仲間の団らん、近所付き合い、宗教活動、集会場、公園等があるかなど。(カ) 安住の場として住みやすいか、これは衣食住で満足が得られるか。これは現在の孤食ということにもつながってくると思います。(キ) 助け合い、支え合いの活動が行われているかは、ゴミの分別、防犯、災害時の助け合い、見守り活動、最近では認知症の方が安心して地域で暮らせるということがあるかと思いますが、この辺りをコミュニティを見直す7つの視点と考えておりました。

その中でテンミリオンハウス事業を検討しましたが、その位置づけとしては、公助、自助、共助の共助にあたるもので、特に地域を耕すという観点から、地域福祉に対する市民の自主的な取り組みに対して、行政が場所と財源を提供する仕組みで、この共助の原則があるということにこだわりました。

具体的に何をやるか、当初、我々のところでは0歳児から100歳以上の高齢者までという、多世代を利用者として考えておりましたので、7つの内容を挙げております。これまでこの委員会で検討してきました10の機能に対応するものが結構挙がっております。挙がってこないのは災害拠点機能と人材育成で、30年前はそこまでは出てこなかったということがありました。

最後にテンミリオン事業を進める三原則ということで当時考えたのは、やはり多様性、地域性、民間性を最大限尊重した運営をしてもらいたいということです。多様性については、この段階で3つ、4つ作ろうという話をしていましたので、画一的な展開を避ける、様々なモデルの可能性を考慮して柔軟なプランづくりを行ってもらいたいということです。地域性ということでは、その地域の必要性に応じることが必要だろうと。民間性というところでは、運営にはできるだけ地域住民や民間施設、機関が関与して、草の根の自由な発想が運営に活かされることが望ましいということで、その段階では各テンミリオンハウスの中に運営委員会を作って欲しいということで、多様な当事者の意見が出るような運営委員会方式を挙げていました。そこが十分できていないところがあると思います。後は地域の、専門的な社会資源で、30年前は医師会の協力をもらい、お医者さんにボランティアに出てもらい医療相談のような、今の「暮らしの保健室」の発想を先取りしているところがありますけれども、医師会等の協力を得て、地域の人々の医療相談もできると良いという、そういう意味でも地域の資源と協力しながら運営していくというイメージをしておりました。この辺りは今でも課題になっているところがあります。

我々の委員会でもテンミリオンハウスが一つの選択肢に入ってきておりますので、今ある8つの姿ではなくて、もっといろいろな形があり得るということで、当初のイメージはこんなものだったということをお話しておきました。質問はこの後、グループごとでの議論でお願いしたいと思います。

(3) テーマ別ディスカッションについて

<事務局説明>

<グループ討議>

Aグループ 検討テーマ：本地に適した福祉機能の内容と対象者について

Bグループ 検討テーマ：本地で担うことができるテンミリオンハウスのあり方について

Cグループ 検討テーマ：多世代が集える場となるための子育て支援、若者の居場所について

(4) ディスカッションの全体共有

Aグループ：本地に適した福祉機能の内容と対象者について

福祉機能をどうするかということで、福祉と聞くと皆さん高齢者等を思い浮かべると思いますが、そもそも福祉というのはもっと広い概念だということが挙がりました。今まさに議会にも上程してご議論いただいている第6期長期計画においても、武蔵野市ならではの、地域共生社会というのを掲げております。

暮らしの保健室には居場所機能、相談機能がありますが、相談機能と言った場合、パーソナルにその場で解決できる課題もあるでしょうし、市あるいは専門機関につなげて解決していくスペシャリストが必要な課題もあるでしょうし、中には地域につないでコミセンで解決してもらうものもあります。これは一つ、本地とコミセンの距離感もありますし、コミセンとの役割分担にもつながっていくというお話がされました。実はこれまでコミセンにも、地域の相談事を受けて取り組まれているという話もありました。一方、暮らしの保健室では看護師が常駐しており、相談の内容によってはパーソナルで解決できるものやスペシャリストにつなぐものはあると思いますが、地域につなぐもので看護師が適切かということは、少し課題として残ったところです。

人が寄ってくる仕掛けについては、これまで武蔵野市で主にテンミリオン事業を進めてきたわけですが、昼間がメインです。せっかくこの場所につくるのであれば、例えば夜、その場所を子どもが運営していく仕掛けができないかという話になりました。実は今日、委員に出していただいた図、大きな四角が真ん中にある、いくつか小さい四角があったと思いますが、一番道路側に面している四角、あそこは人をキャッチする、人を呼び寄せる場として考えているという話がありました。高齢者だけではなく、この施設は何だろうと気になったところで声掛けをすとか、呼び込む仕掛けを考えているということです。各小部屋は、中から行けるだけではなく外からもアプローチできることを考えているようで、そうすると大きな部屋を通らなくても外から入ることができるため、中高生も使いやすい仕掛けがあるという話がありました。

また、ソフト、人とのつながりが重要だということで、夜もどこかの小部屋に明かりが点いていて、例えばそこで一緒にお酒を飲んだり作業したりすることで、人とのつながりが強くなっていくのではないかという話がありました。そういった管理の柔軟性も一つ、ここではキーになるという話が出ました。

将来のニーズですが、20年、30年見ると、今の高齢者福祉をメインとした機能は必要だろうと。ただ50年先も必要かと言うと、そうではないかもしれないという話が出ました。向こう20年、30年で見るのであれば、今日、資料でもお示していただいておりますが新宿区のみもぎの家、武蔵野市にもありますけれども看多機が必要なのではないかという話もありました。みもぎの家も暮らしの保健室もそうですが、同じ設計者が携わっていてガラス張りで、なおかつ暮らしの保健室では扉が常に開いている状態で人を呼び寄せる仕掛け、あるいは外に気になっている方がいたら寄ったらどう？という声掛けをするような仕掛けになっているという話がありました。

Bグループ：本地で担うことができるテンミリオンハウスのあり方について

大きく分けると2点、本場所の特性からあり方を考えるということ、担い手をどうすれば良いのかについて話し合いました。

場所の特性については、吉祥寺の繁華街に近いという中で、敢えてここに行くという施設をつくっていかねばいけないのではないかと、普通のテンミリオンハウスではない、吉祥寺の繁華街に近いという特殊性を反映していくべきではないかということがありました。もともとのテンミリオンハウ

スは見守りが必要な人が対象ですが、今後はオシャレなテンミリオンハウスが良いということがありました。また、今までは決められたプログラムをこなしていくということが多かったのですが、今後は自分達がやりたいことをやるスペースが必要だということで、例えばフリースペースがあったり、スキップフロアだと良いという話がありました。ただこの中では、自分達がやりたいことをやる、仕掛ける世代があるかということ課題として考えていまして、今想定する利用者層の60代ではなかなか難しいと思われるので、30代ぐらいの方が仕掛けをするようなことが必要になってくるのではないかという意見がありました。

担い手の話になりますが、外の力を上手に使っていくことが重要ではないかという意見がありました。具体的な話については、例えば管理は外部にさせていただき、ボランティアを地域の人達に担っていただくのはどうかということがありました。その中で、外の力を上手に使うにしろ、担い手に魅力だと思ってもらう工夫が必要なので、与えられたプログラムをこなすのではなく、もちろん市の補助があるので一定の縛りはあるけれども、多世代が来られるような、あまり縛りをきつくしない配慮が必要なのではないかと。キーワードとしては多世代交流というものがありまして、距離はあるけれどもゆるくつながるような、例えばご飯の時には一緒にいるような多世代交流がキーワードになるという話がありました。

幸いなことに若い方の力としては、ふらっと・きたまちの担い手を募集した時に、若い人達から手が挙がっていたそうです。30代ぐらいの方が手を挙げていただいたようで、できればもっと吉祥寺に近いところを希望されていたので、今回の件についても希望はあるのではないかという意見がありました。また外の力を上手に使うという意見もありましたが、自分が持っているものを誰かに与える、利用していた人が提供に回るような活躍の場も必要なのではないかということもありました。

Cグループ：多世代が集える場となるための子育て支援、若者の居場所について

最初に、この場における子育て支援の位置づけについて、子育て支援がメインとなるようなところではないのではという話が出ました。子育て世代が来ることによって多世代交流が促進されてこの場自体が賑やかに活性化していくというようなイメージの中で、子どもテンミリとか、おばあちゃん家のような雰囲気があると良いのではないかということです。

子育て世代と高齢者の交流が生まれるような場としては、若い世代が入りやすい雰囲気をどうやったら作っていただけるのだろうかというところに議論が及びました。具体的には、小中学生が遊べる場が月1回でもあれば、小中学生がまず来て、そのお父さん世代、お母さん世代もたまに一緒に来るような場になるのではないかということが挙がりました。月2回のコミセン親子広場には、「0123は嫌だわ」というお母さんもいらっしゃるそうです。0123は立派で広い場所ですが、行くとその場で常にいらっしゃるグループが既に出来ていて、新しく来られたお母さんが入りづらいことがあるそうなので、小さくて行きやすい場があると良いという話が出ました。子育て世代と高齢者が交流するような多世代交流の施設ということで、リスクとして考えられるのが、高齢者世代がどうしても「自分の時の子育てはこうだった」という押しつけが懸念されるということで、ずっと一緒にいるような空間ではなく、基本的には空間を分けて食事の場だけ交流するような、ゆるい交流が望ましいというお話がありました。後は教科書的な、こうすべきという子育てではなく、ゆるい子育てを教えてくれるような講座があれば、若いお母さん達は熱心に聞いていますというお話もありました。

小中高生については、地域ボランティアの方で上手く小中高生と交流できるような人が恐らくいらっしゃるので、そういう方を活用していきたいというのがメインのお話です。こういう場で本当に

ターゲットにしたいのは、元気な中高生というよりはどちらかと言うと引きこもり系の子だろうということですが、そういった中高生をいきなりターゲットにしても、なかなか来ないので、小学生の頃から来慣れた場で、中学、高校で何かあったときに帰って来られるような、時間はかかりますが、そういう場がつくっていったら良いという意見がありました。そういうところを利用した中高生が、今度はボランティアとしてこの場のために活動してくれるようなことを期待したい。高校生のドロップアウト率が5%ぐらい、1000人いると50人ぐらいいるということですが、不良でドロップアウトする人はあまりいないそうです。いじめの問題など、外に向けてというよりは内に籠もってしまう感じだということですが、この近くにも大学がいろいろありますので、大学生ボランティアを活用できないかという話がありました、大学生ボランティアは子どもとも距離がすごく近いので、気軽に話ができ、大学に行きたいというような意欲が自然に生まれてくるような、そんな場になるのではないかと思います。ボランティアもする側も、ちょっとしたことで感謝されることでやり甲斐が生まれて、より意欲が増していくという期待がされます。

ボランティアをやってくれる子達にどうすれば来てもらえるかはなかなか難しいところだと思いますが、例えば高齢者の趣味の作品をフリマアプリ等で売ってあげるお手伝いをして、購入金額の半分ぐらいが手元に入ってくるような仕組みがあったら来やすいのではないかというアイデアがありました。

また、多世代のポイントは食ということで、どうすれば食事の場に多世代交流が生まれるかという視点でお話がありました。オープンで入りやすいエントランスがあって、まずはそこでキャッチする、そこからより施設の内部を使っていくというイメージで、土足で入れるようなタイル張りのエントランスがあるとか、まず入ってみようという気持ちにさせるということ。また、小学生は狭いスペースを好むというお話がありまして、そういう人達のための狭いスペースが2階にあり、個別のものがあって大きいものがあって、例えば時間帯で使い分けという話もありました。どの時間帯もどこかが開いていて、何となくずっと施設全体が活動しているようなイメージです。食事は値段によるという率直な話もあって、500円ぐらいで美味しいものが食べられれば若いお母さんには大変有り難い。一人親家庭という話も出まして、やはり一人親家庭はかなり家庭での食事が難しく、週に1回も自分の家で食事を食べないという子もいる中で、そういう支援にもつながるのではないかという話がありました。

緊急の時に一時預かりがあると心強いということで、専門の保育士となるとかなりハードルが上がってくる中で、資格を持っていない方でもできるようにならないかというご意見もありましたが、これに対しては補助事業なら可能かもしれないけれども、何かあったときのリスクを全て団体が背負ってしまうという課題が挙げられました。

この地域らしい高級感のある場はどうだろうかという話もあって、川路さんの家の話が出て、ハイソな方がオシャレをして、おめかしして来るようなテンミリということですが、子育てひろばで考えた時に失敗談もありまして、かなり高い会費をとるような子育てひろばができてしまって、なかなか難しかったというお話も出ました。

委員長：ありがとうございました。今の3つのグループのまとめを発表していただきまして、何かご意見はありますか。

委員：近所に大学がありますよね。大学生を引き込むためには展示空間のようなものがあつたら良い

ですね。学生の発表ができるとか、学生のアートを飾るとか野外の彫刻を飾るとか、そういうスペースがあると、学生は一所懸命、作業をするのが好きですから。作業を見ながら子どもに手伝わせるということがあれば良いと思います。

委員長：展示スペースですね。時間帯によるいろんな使い方とか、夜間に明かりが点いていれば良いということですね。そうすると運営主体や近隣の方の負担が増えてくるのが心配です。

委員：分棟にしたのは、一部の部屋を借りた人が責任を持ってそのスペースだけ、鍵をかけて帰ることが出来るのではないかと。呼び込む方法というのは、照明器具などで呼び込むことは今、できると思います。裏側の道は、悩みがある人は表から入るよりも裏から入る方が入りやすい。

委員：入りやすさと言うとオープンの方が良いかもしれないですけども、本当に深刻な人はかえって見られたくないとかありますのでね。

委員：若い世代の話ですが、東コミセンの特色として、運営委員に高校生から大学生がいます。ある一定の期間ではありますけれども、運営委員として窓口もしてくれています。もともと小学校のときから地域のことをやっていた子達がいる、その子達が声をかけて入ってくれた子もいるので、人と人とのつながりがないと、場所があるからいらっしゃいと言ってもなかなか難しいと思います。小学校の時から、何となく地域に溶け込んでいる子って分かりますよね。そういう人達がこれから、コミセンにも入ってきてくれることを望んでいます。またそういう経験をした子が、将来、仕事をして戻って来た時に、またコミセンに戻って来てくれると良いなということも考えています。さっき、どこかで出ていましたね、地域での帰属の問題も。そういう人達が上手く回っていくと良いなという気はします。コミセンとの関わりを持ってきている若い人がいるということは大事にしていきたいと思っていますし、引き込まれるものがあるというのが大事なのだろうと思っています。電話の対応なんかもちろんやっていますね。社会体験だと思うんですよね。そういうことが、これからもできる地域でありたいと思っていますし、ベースとしてそういうことが必要だなと思いました。

委員：3つのグループを拝見したところ、子どもからお年寄りまでいろいろな世代が来やすい場所であることと、そういう人達が上手く交流するための仕掛けが重要だと思いました。それでいてオープンな場所で、いろいろなことができて参加しやすい。良い意味で敷居が低い、入りやすいスペースが必要だと思いました。

委員長：コンサルに方向付けの整理をしていただいたようですけども。

コンサル：テーマを3つに分けましたが、動いている方もいたので、似たようなことがキーワード的にあるかと思います。Aグループからは相談機能が3つに整理されて、専門家がどういう役割を果たすか。暮らしの保健室がずっと話題になっていますから、それがもう少し具体的にどういうことなのかということは提案される必要があると思いました。管理の柔軟性、Cグループでもゆるい交流、ゆるい子育てというのがありましたけれども、どこまでソフトな仕掛けとして、敷居を低くするようなご提案ができるかということ、ハード的には道からよく見える、人を惹きつけるような空間の仕掛け

もあるかもしれませんが、縁側のようなものかもしれませんが、外側からも見えるような物理的なこともあるかもしれません。トータルでどういう管理の工夫ができるのかということも、中間報告のところでは可能性を書いていただいた方が良いのかなど。50年後というかなり長期スパンの施設の位置づけということも指摘されましたけれども、これも重要だろうと思いますが、見通しがつけられるのかどうか難しい問題かなと聞いていました。

Bグループからはオシャレなテンミリオンハウス、吉祥寺に近いというところで、どうやって多様な人を引き込むかというところで重要だと思いますが、一方でおばあちゃん家のイメージというものもありますから、このイメージを統一できるのかというのが肝心なことになるのかなと思いました。どういうテンミリオンハウスかというのがありますがけれども、面白いと思ったのは、外の力と内の力を上手く組み合わせる、管理を外部に任せても地元でお手伝いをしていくという。私見ですが、中山間地域の集落営農というスタイルがあって、高齢化してきて田んぼが守れないことに対して、営農さんというまだ元気な人にみんな田んぼを託すわけです。土地を持っている人は何もしないのではなくて、長年培った田んぼの世話はできるので、田植えや農薬散布や収穫はできないけれども、水の管理などは毎日見なければいけないなど、何年も田んぼをやった人が上手とか。六次産業で、農作物に手を加えて味噌を作ったり加工をして、小遣いを稼ぐことはおばあちゃん達がやるとか、上手く力のある人と知恵のある人が協力して田んぼを守っているというスタイルがあるんですけども、都会でもそういう仕事の管理は力を借りても、きめ細かな対応は地元でやるようなスタイルは追求されるべきだと思います。

多世代の方は発表にありましたように、子育てメインの施設づくりではないけれども、多世代にするために子育て支援もとても重要な要素で、ゆるい交流、ゆるい子育てというのが0123とは違う形でここで実現できるとしたら、それはかなり将来を見据えた新しいものなのかなど。食事をどう提供するか、レストランをするわけにはいかない場所なので、その辺の上手い仕掛けを含めて、食でつながり交流と子育て、多世代での有り様、何でも子どもが来れば良いというわけではないですけども、小学生の頃から関わりを持って中学、高校で少し傷ついた時に頼りになるような、そういう小さい施設かもしれないけれども重要な拠り所になると良いという話がされたのではないかと思います。

(5) 中間のまとめの方向性と課題について

<事務局説明>

委員長：これまでの2回、それから今日の委員会を経まして、方向としては4つぐらいの方向を考える事ができるのではないかと思います。

一つは食堂、カフェの事業を媒介として、多世代交流促進の場をつくるという方向です。食堂、その中にカフェも入ると思いますが、食堂事業が皆さん、必要だということで出ておりますけれども、それを媒介とした多世代交流を促進する場をつくるというのがこのスペースに求められていることだろうと思います。そういう食堂事業が一番やりやすい枠組みとしては、武蔵野市ではテンミリオンハウスというものがあるということで、それをつくるとしたらオシャレなテンミリオンハウスと言うか、かなり新しいニューテンミリオンハウスと言うか、多世代型のテンミリオンハウスと言うか、そういうところを具体的な軸として考えて行ったらどうかというのが一つです。夕食の問題をどうするか、みんなの食堂という形をどうするかということが出てきますけれども、その辺りの検討課題があるだろうと思います。

二つ目としては、多目的スペース、気軽に自由に利用出来る多目的スペースとしての居場所をつくる必要がある。みんなが足を運んでみたい、中に入りたいと思えるような気軽に自由に利用出来るスペースがある。それはおしゃべりサロンだったり読書スペースであったり、場合によっては中高生の勉強場所や居場所にもなる、あるいは親子ひろば的な育児のスペースになる。利用主体によって時間で区切るかとか、いろいろなやり方があると思いますけれども、これはある程度、やや小さなスペースで複数、3つ程度つくっていく。そのために入口から最初の部屋に至るエントランス空間の魅力、外から中の様子が見えるような工夫が必要になってくるだろうと思います。

三つ目としては暮らしの保健室ということがかなりワークショップ等でも出ておりましたけれども、暮らしの保健室と銘打つのは別にしまして、そういう相談機能、連携機能、育成、学びを含んで、幅広いいろんな相談を受ける場になるような暮らしの保健室機能を発揮できる場をつくるということがあるのではないかと思います。これには二番目に申しました多目的スペースの一つぐらいをそこにあてる。毎日というわけにはいかないとも思いますので、週1とか月数回とか、いろんなパターンがありますが、そういう形をつくっていくことも一つ考えられると思います。こういう暮らしの保健室的な機能を活かせる場をどういう風に設定できるかということが三番目の方向になるだろうと。

最後に災害時の支援機能、これはこの地域としても必要だろうということで、庭を含めた施設全体として可能な災害時の支援となるようなものをどういう形で用意しておくか、ということも考えておいた方が良いでしょう。

大体この4つ、食堂事業を媒介とした多世代交流促進の場をつくる、気軽に自由に使える多目的スペースとしての居場所をつくる、暮らしの保健室的な機能を発揮できる場をつくるということが方向としては出てくるのではないかと。災害時支援はまた別途になりますが、運営主体をどういう形で考えて行くかということでは、武蔵野市が展開している支え合いのまちづくりということから言って、ボランティア団体、グループ、地域活動団体等の民間団体が運営を担うのが望ましいという原則は持っておきたいと思います。先ほど外の力、内の力というのがありましたけれども、どこがやるにしても自分達のところで全て担うのではなくて、いろんな外の力を借りる、特に吉祥寺に近い場所としての中高生、若い世代の参画というのは、非常にやりやすい条件を持っておりますので、そういう力をどう借りてくるのか、活用していくのか、あるいは参画してもらうのか。障害をもった人、外国の方等の参画も考えながら運営のあり方について考えていかないといけないと考えています。

事務局：委員より、机上配布した資料のとおりミモザの家を視察されたということで、それについてご説明をいただければと思います。

委員：ワークショップの段階でも看多機能を希望する声はいくつか出ていたのと、前回ご説明はいただきましたが、私が具体的なイメージを持ちにくかったので視察をさせていただきました。見に行ったここは、今回私達が検討している土地のことを思い出すと、大変小さなお家一軒分のスペースで、3階建ての建物が建てられ、1～2階をこの施設が使い、3階をオーナーさんが住居とされています。オーナーさんのところで看取りをされた訪問看護の団体が、近くで訪問看護ステーションをやっているのですが、そこがここで看護多機能の施設を運営している状況です。もともとこの土地や地域と非常につながりがある団体が運営されていることで、地域の認知や運営の仕方なども既にノウハウをたくさん持っているところなので、そこがやりやすいような形でつくられたというのは当然ある

と思いますが、ただ狭くても4人のショートステイが受けられるスペースを確保されて、もちろん家の中にエレベーターも付けているので、退院支援のところに非常に大きな力を発揮されているところが今、これからの東町の地域にも当然大きく役に立つ機能を持っているものだと思います。今、出ていた中の、こういう形に使われたらどうかというもので、全館使う状況ではないと思うと、その空いているところでも、これも入るのではないかという気がするぐらい小さいスペースでも良い形であれば十分可能な施設です。今、私達が話し合いの中で対象としていた方々と、この看多機を必要としている方々では身体状況は大きく違うわけで、当然、その日はみんな来るものでもあります。子育ても大変ですが、介護はもっと大変と思われる世代が介護をせざるを得ない時期が、これからどんどん来るので、こういう看護小規模多機能型居宅介護というのは求められていくことは多くなると思っています。そういう意味ではこの機能はこれから絶対に考えなければいけない分野だと思いますので、入れられるのであれば入れていけなかつと思うのと、暮らしの保健室をやるとすれば、こういう機能がついている施設になれば看護師さんが当然いるわけですから、やって行きやすいだろうと思います。ここも機会があれば皆さんに是非、見ていただきたいところです。

委員：私も新宿区の施設は非常に興味を持っていて。前回、新宿区のいろんな施設の冊子をお渡ししたと思いますが、ここもその一つです。前面道路が本当に狭いところですが上手く使っているなというのと、先ほどのAグループの将来のニーズと書きまされたけれども、これは将来50年先のニーズはたぶん、高齢者のデイサービスとかショートステイは減っていくだろうけれども現在は必要だと委員も仰っているところなので。この機能はやはり地域的には必要だと思うし、介護されている方の負担も、ショートステイやデイサービスがあるといくらかでも軽減できるのではないかと思います。見て思ったのは、トイレも車椅子で回れるようになっていて、これはたぶん東京都の要件に入っていることでしょうけれども。浴室もとても充実していて、リフトでスライドして移動して浴室に入っていけるようになっていますが、50年先、60年先のことではなくて今、これから30年、40年先のこととしてはこの機能は絶対に必要だろうと思います。当面の機能としては看多機の機能が地域的には必要だと考えました。前面道路の問題も、小さな車が2台入っていて解決しているように思いました。この広さからすると、市有地はすごく広いです。何倍と言って良いくらい広いです。上手く機能的に出来ていると思いました。2階がショートステイですが、個室感覚がありつつ外へ開かれている感じもあって、完全に閉ざされている感じがありませんでした。もちろん床はフラットですし、1階部分は暮らしの保健室のイメージそのままだったので訪ねたところ設計者も同じと言うことでした。看取りに関わった方がその後携わっているということがとても大事なことだろうなと思いました。ボランティアという言い方もあるかもしれませんが、当面お世話になっている方でそういう看取られたまわりの方々がここを支えていこうという気持ちになっているのは、この施設が充実している一つのことだと思いました。

12月、少し先になりましたけれども、私も家内の親が今94才で、母親も92才ですが、デイサービスに行ったりしているのが横浜市です。たぶんこういう機能ももちろん持っていると思いますが、そこを違う目で見たいと思っています。それこそ家内もある程度、歳も行っていきますので、だんだん老老介護になることもあって、8月の第1回目の暮らしの保健室では、看護師さんに自分のことを相談しています。パーソナルなことではありますけれども、私も今、家内の親がお世話になっている施設を、今度は違う目で見たいと思っています。次回には間に合わないかもしれませんが、次々回には間に合うかもしれません。

ミモザの家にはカメラを持っていかなかったので、写真が撮れていなくてすみません。浴室はとても感動しましたし、トイレの広さにも感動しました。エレベーターもとてもゆっくりで、とても良いと思いました。見通せる建物が良いと思いました。先ほど委員が仰っていた、皆さんが入りやすい空間、建物づくりはとても必要だと思いました。ここはまさしくそんな感じのイメージそのままでした。明るいというのと外から中がよく見通せるということが大事だと思いました。

3. その他

<次回の日程について事務局説明>

4. 閉会